概　要

崔吉城「サハリン瑞穂村の朝鮮人虐殺事件」は、1945年日本の敗戦直後、サハリン瑞穂村で起きた日本人村民による朝鮮人27名の虐殺事件を掘り起こした。ソ連当局は犯人を逮捕し有罪判決を下したが、なお不明な点は少なくない。事件の背景には日本人が朝鮮人をソ連のスパイと見なす疑心を抱いていた点が指摘されている。

韓道鉉「ベトナムでのコリアン・ディアスポラ・コミニュティの展開と課題」は、体系的研究のほとんどなされていないベトナムにおけるコリアン・コミュニティーについて、職業や定住の試み、ホスト社会との関係などの側面を明らかにし今後の展望を示した。在ベトナム・コリアンコミュニティーはベトナム戦争当時から形成され、1972年の韓越国交回復以後急増した。経済的な影響力は強いものの一時滞在者としての性格が強い。

両報告は、それぞれ深く対象に根ざした個別研究であり一見すると議論に重なる点が少ないように思われる。しかし、いずれも第2次世界大戦とベトナム戦争という「戦争」が大きく影を落としている点、またそのことがそれぞれの在外コリアン社会とホスト社会との関係性を規定している要因となっている点は、現代におけるディアスポラの一面を示唆しているともいえるのではないか。

（松田利彦）